

前置詞研究のあり方「関口存男:前置詞論」試案 — anを例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 清昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/240

前置詞研究のあり方 「関口存男: 前置詞論」試案 — an を例として

佐藤清昭

(日本語・日本事情)

Zur Erforschung der Präpositionen bei SEKIGUCHI T.

SATÔ Kiyooki

Japanisch u. Japanische Angelegenheiten

Zusammenfassung

Der japanische Philosoph und Sprachwissenschaftler SEKIGUCHI Tsugio (1894-1958) wollte nach seinem monumentalen Werk "Der Artikel" (1960/61/62) Arbeiten wie "Die Präposition", "Das Adjektiv", "Das Adverb" u. a. schreiben, die aber wegen seines Todes nicht ausgeführt werden konnten. Uns, die ihm nachfolgenden Forscher, interessiert nun, was für ein Forschungsprinzip der jeweiligen Arbeit zugrunde gelegen hätte und was für ein Werk in Bezug auf Inhalt, Form und Umfang entstanden wäre.

Die Absicht der vorliegenden Arbeit besteht darin, 1) das Prinzip, nach dem Sekiguchi das Werk "Die Präposition" geschrieben hätte, herauszuarbeiten und 2) die Bedeutungstypen ("imi keitai") der Präposition "an", die sich in Sekiguchis zahlreichen Werken und in seiner Sammlung der Beispielsätze, Collectanea, finden, aufzuzählen und ordnungsgemäß darzustellen.

Nach Sekiguchi sollte die Präposition folgendermaßen erforscht werden: Die "Typen" der Bedeutung der jeweiligen einzelnen Präpositionen werden scharf unterschieden und systematisch dargestellt, wobei das objektive Kriterium die Verben sind, die die jeweiligen Präpositionen regieren.

Die "System-Bedeutung" von "an" wäre: die Oberfläche (eines Gegenstandes) berührend. Von dieser System-Bedeutung ausgehend lassen sich 22 Bedeutungstypen feststellen, die teilweise in über- und untergeordneten Verhältnissen stehen.

Key words: SEKIGUCHI Tsugio, grammar, preposition, German preposition "an"

キーワード: 関口存男, 前置詞, ドイツ語前置詞 an

0. はじめに

0.1. 関口存男 (1894-1958) の死後発表された大著「冠詞」¹⁾は、関口が本来意図した「大文法」のごく一部に相当するにすぎない。これについて関口自身、次のように語っている。

「ドイツ語文法の全分野に亘って、かなり多くの問題を解決し、かなり多くの問題を提示するに足るだけの材料と準備と思想と基盤とは出来てしまったが……悲しいかな、もう余年がありません。いまちょうど冠詞論をやっていますが、ひょっとすると冠詞論だけでおしまいになるかも知れません。つまり、計画したことの十分の一ないし二十分の一で人生がおしまいになるわけです。」²⁾

関口は「冠詞」に続く著作として、「形容詞論」、「副詞論」、「前置詞論」などを考えていた。³⁾

「冠詞」における研究の洞察の深さと規模の大きさ、そして関口が生前収集した膨大な量の「文例」の存在⁴⁾を考慮するとき、私たちの興味はおのずと、これら未完に終わった研究がどのような形式と内容を示すものであったろうかという点に向いていく。

0.2. 関口は特に前置詞論について、執筆する時間のない「心残り」を次のように表現している。

「ところで、冠詞論を書いている最中、たびたび問題になるのが前置詞の用法で、これだけは、せめて此の書その他でいろいろな印象的な普通の場合だけでもチョッチョッとまとめておいてよ

1) 第1巻「定冠詞篇」1960年 (1,063ページ)、第2巻「不定冠詞篇」1961年 (600ページ)、第3巻「無冠詞篇」1962年 (638ページ)。

2) 「ドイツ語前置詞の研究」, 序 (2)。なお、この「大文法」の構想については「生涯と業績」(S.59ff.)にも述べられている。

3) これについては以下を参照: 冠詞 I, S. 45, 483, 784; 冠詞 III, S. 541, 脚注。なお、「冠詞」校正委員の一人である藤田栄は、その第1巻の「まえがき」で、関口が少なくとも20以上のテーマを選んで意味形態論を展開する予定をたてていたこと、また第3巻の「あとがき」で、冠詞論のほか前置詞論、形容詞論、副詞論なども、意味形態論を展開するための好テーマとして関口の意図の中にあったことを述べている(冠詞 III, 「あとがき」, S. 640)。

4) 関口は生前、30年以上にわたって、10以上の個別言語から多種多様な例文を収集していた。註2の引用で述べられている「ドイツ語文法の全分野に亘って、かなり多くの問題を解決し、かなり多くの問題を提示するに足るだけの材料」とは、この「文例集」を指していると考えられる。文例の総量はA4判コピーの形にまとめて24,502ページに渡る。文例集について詳しくは、佐藤(1998)参照。

かったと、つくづく思います。たとえ、ごく啓蒙的な、不完全な説き方であるにせよです。』⁵⁾

0.3. 佐藤は前論「関口存男による前置詞の意味分類」において、以下のことを試みた。⁶⁾

- a) 関口の著作と文例集に現れる前置詞の「意味類型」のうち、確認できたものをすべてあげ、その出典箇所と文例を示す、
- b) この「意味類型の羅列」に学問的な秩序を与える研究上の観点をあげる。

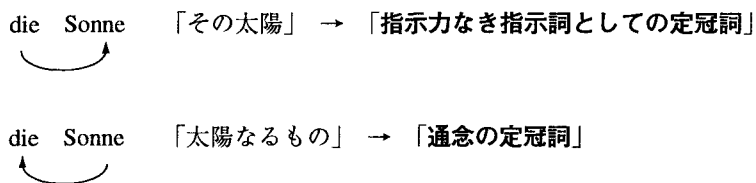
その目的は、ドイツ語教育に資すること、そして未完に終わった「前置詞論」の概観をえる糸口となることであった。

本論では前論に続く研究として、まず関口が描いていたと思われる「前置詞論」の基本的な構想について述べる。これは「前置詞研究のあり方の一つ」を提示することになるであろう。続いて関口の著書に分散している an についての説明と例文を一定の秩序のもとにまとめる。これは「前置詞論」の各論の一部をなすものである。

1. 前置詞論の基本構想

1.0. 規定関係: 冠詞論と前置詞論

「冠詞論」の出発点は、定冠詞と名詞の間にある「規定関係」であった。定冠詞を、冠詞としてではなく独立した1語とみるとき、名詞との間には2つの規定関係が存在するが、冠詞論第1巻では、その違いに基づいて定冠詞の2大用法が詳述された。⁷⁾



これに対して前置詞では、「規定関係」は1つの可能性しか存在しない。

5) 「ドイツ語前置詞の研究」, 「序 (2)」。

6) 参照: 佐藤 (2000)。

7) 参照: 冠詞 I, S. 2ff. なお第2巻の「不定冠詞篇」では、同様の規定関係の違いが、「内的形容規定」と「外的形容規定」として現れる: 冠詞 II, S. 405ff., 490.

an dem Tisch (an dem Tisch は「an の一種」)⁸⁾

したがって「前置詞論」では、「規定関係の違い」、そしてそもそも「規定関係」が論述の出発点となる可能性は少なかったと言ってよいと思う。

1.1. 動詞の前置詞支配

関口は前置詞の研究について、次のように述べている。

「前置詞研究は、動詞の前置詞支配なる現象をば、逆に、前置詞の意味形態を明確に把握することによつて段々と系統付けて始めて真の研究たり得るのです。その方法は、極くわかり易く云へば Typologie (類型論) と名づけることも出来ませう。」⁹⁾

ここで言う「前置詞の『意味形態』」とは、「前置詞の『意味の類型(型, タイプ)』」と考えてよい。¹⁰⁾ 関口はつまり、前置詞の研究を次のように考えていた。

それぞれの前置詞が個々の具体的な場合に用いられるさいの意味から「類型」を導き出し、それらを系統づけていくこと。

それでは関口は、その「類型」を求め、それらの系統づけを行う際の「方法論」についてはどのように考えていたのか？ここで注目すべきは、関口が上の引用で、「前置詞」の研究を「動詞の『前置詞支配』」と結びつけていることである。以下では、この点がさらに積極的に表現されている。

「以下の實例においては、何時も申すことですが、単に an だけではなく、その an とどういふ種類の動詞が結びつき得るかという事に特に注目して頂きたいと思ひます。つまり結局は広い意味での動詞の前置詞支配に関する研究ですから。」¹¹⁾

「どういう種類の動詞と結びつき得るか」という点に注目することの重要性について、関口は別の場所で次のように説明する。

8) 前置詞句の規定関係については次の関口の言葉を参照: 「in dem Zimmer (部屋 / の中で) は in の一種である。Zimmer の一種ではない。……前置詞の場合はすべて被支配語の方が規定部であることは、日本語の順でも明瞭であり、理屈の上からも明瞭である。」冠詞 III, S. 545, 太字関口。

9) 「ドイツ語前置詞の研究」, S. 60. 下線佐藤。

10) 「意味形態」を「意味の『類型』」と考えることについては以下の Exkurs を参照。

11) 関口 (1939; 1981), S. 376, 太字関口, 下線佐藤。

「検証の an は、或點に於て、しばらく前に述べた『仕打ち』の an とよく似てゐるから注意を要します。…かういふ場合にはすべて動詞がどんな意味であるかを基準にして分類すべきで、動詞の意味によつては中間現象も生ずる譯です。」¹²⁾

以上から関口は、「前置詞論」の基本的な構想を次のように考えていたと結論してよいと思う。

それぞれの前置詞の「意味の種類」を的確、かつ明確に規定し、それら「種類」間の系統関係を求める。その際のより所（識別点）は、その前置詞が「どういう意味形態の動詞と結びつくか」である。¹³⁾

Exkurs: 「意味形態」について

上の引用（註9）では「前置詞の『意味形態』」という表現が用いられている。関口はその数多い著作の中で、「意味形態」という用語をいくつかの異なった意味で使っているが、前置詞の場合は、たとえば「付帯描写の mit」, 「用向きを指す auf」, 「場合の bei」などにおける「付帯描写」, 「用向き」, 「場合」という「意味の種類」を「意味形態」と呼んだと解釈してよい。

また本論文で「動詞」について「意味形態」という術語を使う場合も、個々の具体的な「意味」の一段上に存在する「型」, あるいは「種類」を指すものとする。これは例えば次の関口の言葉にしたがったものである。

「以上の例では、『誰それに対して』といふ『對して』の an が凡て三格になつてゐることがわかると同時に、動詞そのものに、前述の『誰それ宛てて』の際とは根本的に違つた、一定の意味形態があることが明らかになります。私は特に意味『形態』と言ひます。如何となれば、たとへば『復讐する』と『寛大な態度を取る』との間には、意味の共通點はちつともない、むしろ意味は反對です。ところが、復讐するにしろ、恕すにしろ、とにかくそれが一人の人間に對する『仕打ち』であることは似てゐます。」¹⁴⁾

「意味」はほとんど反對である「復讐する」と「寛大な態度をとる」という二つの動詞が、「仕打ち」という観点からは、同一の「意味のタイプ」（意味形態）に属するのである。

12) 「ドイツ語前置詞の研究」, S. 100.

13) ここで言う動詞の「意味形態」については、以下の Exkurs を参照。

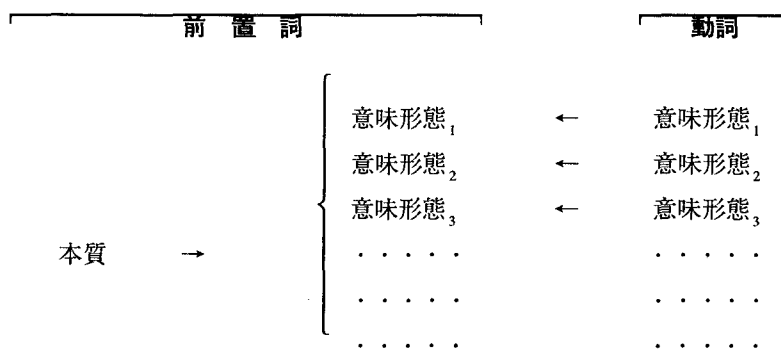
14) 「ドイツ語前置詞の研究」, S. 62f. 下線佐藤。なお、「意味形態」という用語の多義性については以下を参照: 有田 (1985), — (1987); Satō (1981), — (1987), I. Teil.

1.2. 前置詞の意味の「本質」(System-Bedeutung)

しかし、前置詞の「意味類型」を規定し分類する上で、「どういう動詞と結びつくか」ということが識別点になるとはいえ、前置詞の「意味形態」が、一方的に(それを支配する)動詞の影響下で生じるわけではないことは明らかである。そこには前置詞の側からの「働きかけ」が存在する。つまり、それぞれの前置詞に特有の、いわば「本質」¹⁵⁾とも言うべき「意味」があり、それゆえに一定の動詞がその前置詞を支配して、その場合の前置詞の意味形態が生じるのである。

この、前置詞の「意味の本質」とは、例えば an が an そのものとして持つ意味内容、つまり an という前置詞が、in, auf その他の前置詞から区別される意味内容であり、an という形態に純粋に「言語的」に、一義的 (primär) に対応する意味内容である。言語理論的には「言語体系 (Sprachsystem)」に属し、構造主義言語学が「体系上の意味 (System-Bedeutung)」と呼んで、その研究対象とするものである。¹⁶⁾

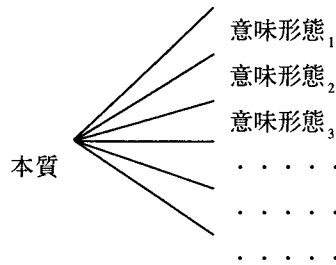
1.3. 前置詞の意味形態が、前置詞の「本質」と動詞の意味形態から生じる関係は次のように図示することができる。



この図で注目すべきことは、前置詞のすべての意味形態が、その間の上位・下位の関係以前に、まずは「本質」を通じて等しく結びついている点である。

15) 「本質」という語を関口は例えば次のように用いている: 「an の本質は、たとへば in の反対とも云う可きで、in が内部を指すに反して an は外部を指します。」関口 (1939; 1981), S. 379. 下線佐藤。

16) System-Bedeutung については、以下を参照: 佐藤 (1995), S. 5f.; — (2000), S. 45.



2. 前置詞 an の本質と意味形態

2.0. 関口存男は前置詞 an について、例えば次のように述べている。

「an は『何々に即して、接して、の表面に』という意味で、英語にはぴったりあてはまる前置詞がありません。an の色んな用法がわかり出せばドイツ語は卒業です。」¹⁷⁾

「その中でも (具体的・空間的な意味を持つ in, vor, hinter などの中でも), an だけは、出立点たる具對的・空間的な意味そのものが、ドイツ語特有であつて、他の語にはぴったり相當するものを見出し得ないという點で非常に興味を惹く前置詞です …。」¹⁸⁾

以下、このような「特別な」an について、その「本質」、そして「意味の種類」(意味形態)をあげていく。

2.1. an の「本質」¹⁹⁾

in の反対。in が内部を指すのに対して、an は外部を指す。ただし「外部」といっても、außer や außerhalb とはちがって、そのものを遠く離れた外部を指すのではなく、すぐそのもの一部をなしている「外面」、またはすぐそのものに接触する「域」を指す。

「外面」: An einem Körper bemerken wir zwei Eigenschaften: seine Gestalt und seine Farbe.

「域」 : Der Wagen hielt am Bürgersteig.

2.2. an の意味形態

2.2.1. 命名の2つのあり方

以下の意味形態を「命名のあり方」から観察すると、2つのグループからなることがわかる。

17) 関口 (1931-1933; 1936), 第三卷, S. 263. 下線佐藤。

18) 関口 (1939; 1981), S. 379. カッコ内補足, および下線佐藤。

19) 参照: 「ドイツ語前置詞の研究」, S. 94; 関口 (1939; 1981), S. 379f.; 冠詞 I, S. 253.

an を支配する動詞の意味形態から命名されている場合

(例えば「仕打ちの an」, 「享受・受益の an」など)

an の機能そのものから命名されている場合

(例えば「拠点の an」, 「見地の an」など)

後者の「an の機能そのものから命名されている」場合は、前者の「動詞の意味形態から命名された」場合に対してより広汎な性格であり、その意味形態は下位グループに分類されやすい。

2.2.2. 意味類型の並べ方

はじめに「具体的・空間的なグループ」を、続いて「抽象的・象徴的なグループ」をあげる。これは関口の次の言葉にしたがったものである。

「an に限らず、その他 in, vor, hinter, auf, unter, aus, nach, neben 等、前置詞の大部分は具体的・空間的な意味をもつてゐて、それが轉じて象徴的に諸種の無形の関係を表現するやうになつたものですが、...」。²⁰⁾

「具体的・空間的なグループ」、および「抽象的・象徴的なグループ」それぞれの中では、原則として「注目すべきもの」、「重要なもの」からあげることにする。ただし、どの意味形態が「より注目すべきもの」であるかについては、必ずしも客観的な判断基準が存在するわけではない。関口の語り口、その意味形態の現れる頻度、佐藤の見解などを総合的に考慮してのものである。

2.2.3. an の意味形態の概観²¹⁾

- ① 具体的接触を示す an, 外側に向かって加えられる動作を示す an
- ② 部分的処理完成の an
- ③ 着力点の an, 把捉肢節の an
- ④ 「宛てる」の an, 人に宛てて
- ⑤ ……に当たって碎けるなど
- ⑥ 手段, 「……で」
- ⑦ 位置を示す an
-
- ⑧ 当面過程の an

20) 関口 (1939; 1981), S. 379.

21) 以下の概観において、第1の点線は「具体的・空間的なグループ」と「抽象的・象徴的なグループ」との区切りを示す。第2の点線は、「展張方向・展張限度」という意味形態の特殊性によるものである。

- ⑨ 拠点の an, …を試練台にして, …にすがって, …に頼って
 - ⑩ 検証の an
 - ⑪ 識別点
- ⑫ 見地の an
 - ⑬ 比較(評価)見地の an
 - ⑭ 異変肢節の an
- ⑮ 享受・受益の an
- ⑯ 仕打ちの an
- ⑰ 性質の an, 性質を指す an, 具有の an, 具有性の an, Inhärenz-an
 - ⑱ 同一視の an, Identitäts-an
- ⑲ 内容を示す an, 内容挙述の an, 量的内容規定の an
- ⑳ 破滅の原因, 挫折の直接原因となる外界の威力を指す an
-
- ㉑ 展張方向・展張限度の an
 - ㉒ およそ

2.2.4. an の意味形態²²⁾

① 具体的接触を示す an, 外側に向かって加えられる動作を示す an

[格支配] 3格, 4格

[例文]

- ・ Das Pferd zieht am Wagen.
- ・ Wenn man an einem Faden zieht, dann trennt sich das ganze Gewebe auf.
- ・ Er steht verlegen da und dreht in einem fort an seinem Hut.
- ・ Wenn er nervös ist, kaut er an seinen Nägeln oder seinem Bleistift.
- ・ Die Flammen lecken nun an dem einzig stehen gebliebenen Gebäude.

[同一の用法に用いられる動詞]

ziehen, schleppen, zerren, zupfen, rupfen, kratzen, reiben, putzen, bürsten, zwirbeln, drehen, polieren, reißen, rücken, rütteln, schütteln, lecken, schlecken, saugen, schnitzen, hobeln, riechen, lockern, bröckeln,

22) 以下, ①② というように番号をふって「関口の言葉による」an の意味形態をあげていくが, 「より分かりやすい表現」が必要と考えられる場合は, 続くカッコの中で佐藤による補足を行う。そのほかの記述, 例文などは, [佐藤による注釈] の項を除いてすべて関口による。

nagen, kneifen, fressen, tasten, nesteln, kauen, beißen, schnobern, schnüffeln, nippen, malen, pinseln, basteln, stoßen, klopfen など。

[備考]

- この用法はすべて具体的・空間的であるが、多少たりとも無形の事柄に応用するか、または「処理」とか、「完成」とかいった観念を念頭において用いると、次項の「部分的処理完成の an」になる。

[参照箇所]

ドイツ語前置詞の研究: S. 36-38; ドイツ語学講話: S. 380-383.

② 部分的処理完成の an

[格支配] 3 格

[説明]

- すでに存在するある物を、だんだんと部分的に処理する動作（削減、削除、変更、修正、解決など）。
- 動作が一時にその物体の全部に向かってなされるのではなく、時とともにだんだんと完成していくようなある種の目的に向かってなされる動作。まだ存在しない物を、だんだんと部分的に完成していく動作。
- 少しずつコチコチと働きかける。

[例文]

- ・ Er arbeitet (または malt) an seinem ohnehin aussichtslosen Gemälde.
- ・ An den Wissenschaften, die wir heute besitzen, haben seit bald drei Jahrtausenden unzählige Menschen gearbeitet.
- ・ Ich habe an meinem Manuskripte noch einiges auszubessern.
- ・ Wir wollen stark Getränke schlürfen; nun braut mir unverzüglich dran!

[備考]

- zu 不定形 + haben とともに用いる場合（「内容を示す an」に通じる）。
Das böse Gewissen ist wie eine Last, an der man eine Zeitlang keuchend zu schleppen hat.
- schwer an ... tragen とともに用いる場合。
Auch Goethe trug schwer an der deutschen Sprache.
- an ... herum- の結びつき（その表面の、ある一定の隅っこをどうこうするのではなく、「あっちやこっちを」いじくり回すという考え方）。

"Alles nörgelt und bessert an Fränzchen herum," sagte sie finsternen und verlorenen Tons, — "Warum läßt man ihn nicht, wie er ist?"

- 部分概念を表現する in と von を参照。

Er liest immer in der Bibel.

Er ißt vom Brot.

[参照箇所]

ドイツ語前置詞の研究: S. 31-44; ドイツ語学講話: S. 373-389; 文例集 29 (前置詞): S. 397-402, 407-413.

③ 着重点の an, 把捉肢節の an (力が「作用」する点 Angriffspunkt を表現する)

[格支配] 3格

[例文]

- ・ Sie faßte mich freundlich an der Hand.
- ・ Man muß das Problem an der Wurzel fassen.
- ・ Schlangen faßt man immer am Kopf.
- ・ Die Faultiere hängen an ihren kräftigen Krallen an den Ästen, Bauch nach oben, Rücken nach unten.

[同一の用法に用いられる動詞]

nehmen, fassen, ergreifen, packen, anfassen, anpacken, angreifen, führen, ziehen, schleppen, schleifen, hängen, aufhängen, halten, zurückhalten, festhalten など。

[備考]

- ある種の熟語 (jn beim Worte nehmen; jn bei seinem Namen nennen, etc.) を除けば「着重点の bei」とほとんど大した相違はない。少なくとも bei を用いる場合は大抵 an を使っても同じ (但しその逆は真ではない)。
感じから判断すると、きつくつかむ場合には bei, そうでない場合には (すなわち一般的には) an が適当と言えないこともないが、しかしそれすら実際には大して考慮されていない。
- 単に着力「点」だけではなく、着力の方法まで詳しく指定する場合は, unter (jn unter dem Arm fassen), über (jn über dem Handgelenk fassen), in などが用いられる。

[参照箇所]

冠詞 I: S. 252-257, 954; 文例集 69 (an): S. 164-168.

[佐藤による注釈]

- ある種の場合は、「⑥ 手段」と一致する。
Sie führt ihn schön hübsch an der Nase herum.

④ 「宛てる」の an, 人に宛てて

[格支配] 4 格

[例文]

- ・ Er richtete seine Proteste an die Obrigkeit.
- ・ Er wandte sich an seinen früheren Amtskollegen.
- ・ Ein Trostgeschenk Gottes an die Menschheit ist die Kunst.
- ・ Noch hat er nicht an mich geschrieben.
- ・ einige Briefe sind an mich eingelaufen
- ・ Dies kann beinahe als eine Kampfansage an Moskau gelten.
- ・ Der Appell an die Vernunft

[備考]

- 混同されやすいものとして「⑩ 仕打ちの an」があるが、形の上からも「仕打ちの an」は 3 格支配であるし、意味形態も異なる。

[参照箇所]

ドイツ語前置詞の研究, S. 60-61; 文例集 69 (an): S. 236-242.

[佐藤による注釈]

- 文例集に「所有の移転先」という項目があるが、これは本意味形態と同一視できる (69, an: S. 214-225)。
Und dass sie diesen Wein an einen Bettler gegeben hat (S. 216)
裏切り渡す, 明け渡す, ゆずり渡す (S. 225)

⑤ …… に当たって碎けるなど (「当たる」対象を表現する)

[格支配] 3 格, 4 格

[例文]

- ・ Welle auf Welle rollt heran und bricht sich am Strand.
- ・ Schon am zweiten Feiertag hat sie den Wagen an einem Baum kaputtgefahren.

- ・ Solange man glaubte, alle physikalischen Vorgänge durch die klassische Mechanik darstellen zu können, hielt man auch ihr Relativitätsprinzip für gültig. Aber das Prinzip versagte an den elektrodynamischen — auch den wesensgleichen optischen — Vorgängen in bewegten Körpern.
- ・ Ich habe mir den Kopf an so manchen Realitäten zerstoßen.
- ・ Die Strahlen werden an einem harten Gegenstand zurückgeworfen.
- ・ Immer und überall in der Welt mußten Ärzte bisher an dieser Krankheit die eigene Machtlosigkeit erkennen.
- ・ Ich habe mich als Kind oft an einem (einen) Briefkasten gestoßen.

[参照箇所]

文例集 69 (an): S. 294-305.

⑥ 手段, 「・・・で」

[格支配] 3 格

[例文]

- ・ einen am Narrenseil führen
- ・ Der Hut hing ihr an seinen zusammengeknüpften Bändern über dem einen Arm.
- ・ Sein Leben hing nur noch an einem Faden.
- ・ Abgehäutete Tierkörper, Kälber, Ziegen und Lämmer, sind an den Fußklauen aufgehängt.
- ・ Endlich stieg das Fräulein ab, als ihr einige Stufen eine schickliche Veranlassung gaben, und führte das Pferd am Zügel.
- ・ Sie hat mich schön hübsch an der Nase herumgeführt.
- ・ Frau Emy Steenhop hatte uns alle so am Fädchen, daß wir artig wie Pagen in fast ritterlich-romantischer Form unserer Herrin dienten.

[参照箇所]

文例集 29 (前置詞): S. 342, 359-361.

⑦ 位置を示す an

[格支配] 3 格

[説明]

- an という前置詞は, 詳しい意味としては "物の表面に接して" ということで, 他の in や auf や vor や neben とは厳密に区別されるが, それとは別に, いわば Lokativ, 即ち単に位置を

示すにとどまる用法がある。

[例文]

am Platz / an dieser Stelle / am rechten Fleck / an Ort und Stelle / am Ende / am Nordpol / an der Ecke / am Eingang / an einer Wegbiegung / an der Spitze / am Ziel / an diesem Punkt / seine Kraft am Punkt des geringsten Widerstandes einsetzen

[参照箇所]

冠詞 I: S. 253-254.

.....

⑧ 当面過程の an

[格支配] 3格, 4格

[説明]

- 当面過程, つまり「・・・に当面する」, 「・・・に臨む」, 「・・・の番になる」という内容を表わす。
- 「局面に臨む」意味。時々刻々我々の意識がぶつかっていく, 未来一辺倒の, 非可逆的, 非空間的, 発展的, 過程的 (即ち Bergson, Heidegger の考えたような) 時間を想わせる特色がある。
- am Morgen, am Tag, am Mittag, am Abend に対して in der Nacht とすることに注目。Nacht は, 就寝時であり, 時が歩みをとどめて, いわばもはや生きた現実の「時」ではなく, 「いよいよ」という気持ちで「当面」して取っ組むべき「局面」ではないから。人間は, 朝や昼や晩には行動的に「臨んでいる」(an!) が, 夜はもはや局面としての緊張が止んでいるから, 夜「の中」(in) に前際後際を断って沈住しているきりである。

「日」を am 1. Mai と表現するのに対して, Woche, Monat, Jahr, Zeitalter は in を用いるのも同じ関係から来ている。来る日来る日は Existenz の生きた局面であるが, 週や月や年になると, 我々の直接意識をもっては接触 (an!) し得ない遠い抽象界の概念的現象となってしまうからである。「生きている」を am Leben sein と言い, 客観的に「一生涯の中に」という時には im Leben と言うのも同様である。

[例文]

- Die Zahl ist am Wachsen.
- Es war mir, als sei ich am Sterben.
- Er war nahe am Ertrinken.

- ・ Die Preise sind nunmehr am Steigen.
- ・ Oft war sie dicht am Erwachen.
- ・ Ich war eben am Rasieren, als sie zu mir hereinkam.
- ・ Es ist mir alles Wurscht, wenn ich einmal am Trinken bin.
- ・ Er war oft am Verzweifeln und wollte sich den Tod geben.
- ・ Mit Feuereifer ging er ans Experimentieren.
- ・ Jetzt muß ich mich sowieso ans Suchen begeben.
- ・ Nun ging's ans Propagandamachen.

[備考]

- 当面過程の an は、不定形名詞とともに用いるのが普通であるが、他の動作名詞や動作名詞以外の名詞とも結びつく。

am Tode sein, liegen / Wir sind am dritten Kinde./ Ich bin an der achten Zigarette.

- 「いよいよ」というある種の軽い「興奮」が特質をなす（例えば冷静・客観的な「従事過程の bei」との違い）。

Es ist nun wohl an der Zeit, Ihnen das gräßliche Geheimnis zu enthüllen.

- 当面過程の an は「進行過程の in」と時として区別のないことがある。

[参照箇所]

冠詞 I: S. 797, 866-870, 968-969; 文例集 69 (an): S. 134-139.

[佐藤による注釈]

- 「進度の an」(文例集 69, an, S. 163) は、この「当面過程の an」の「下位分野」と考えられる。

- ・ Wir sind am vierzehnten Kapitel.
- ・ Befragte ich ihn manchmal, wie es ihm gehe, antwortete er mit bewölakter Stirn lakonisch: "ich bin an meinem dritten Löffel, oder ich bin an meinem vierten Löffel. (さじを一つ一つ売りながら暮らしている状況)

⑨ 拠点の an, … を試練台にして, … にすがって, … に頼って, an Hand des ...

[格支配] 3 格

[例文]

- ・ Erst an fremden Lebensformen wird man sich der eigenen bewußt.
- ・ Die moderne Himmelsfotografie macht uns an Riesen-Instrumenten den gewaltigen Sternenstrom der Milchstraße sichtbar.

- ・ Seine einsame arme Seele hatte nun etwas, woran sie sich aufrichten und anklammern konnte.
- ・ Gelten die an dem Modell gemachten Beobachtungen ohne weiteres auch für die wirkliche Konstruktion? Nein.
- ・ Die Richtigkeit dieser Feststellung wurde nachträglich von Tausenden von Ärzten an Zehntausenden von Patienten nachkontrolliert.
- ・ (具体的表現として:) so ergriff sie ihre Krücken, hob sich langsam daran vom Schemel empor,

[参照箇所]

文例集 69 (an): S. 340-354.

⑩ 検証の an (「証拠に当たって調べる」際の「証拠」を表わす)

[格支配] 3 格

[例文]

- ・ Man studiert die Schönheit an Modellen.
- ・ Zwei Reisen nach England hatten mir die Begriffe und Eindrücke, die ich früher im Umgang mit Einzelnen empfangen, am vollen Leben rektifiziert und vermehrt.

[参照箇所]

ドイツ語前置詞の研究: S. 94-100.

[佐藤による注釈]

- 「実験材料, 試練台」(文例集 69, an: S. 355-359) は, この意味形態に属すると考えられる。
 - ・ Er führte den gleichen Versuch am Kalium aus.
 - ・ Er ermittelte an einer Versuchsperson in einem völlig abgeschlossenen Raum die von ihr verbrauchte Menge Sauerstoff und die von ihr erzeugte Wärme.
 - ・ Ich war der erste, der diese Kur an sich selbst durchführte.
 - ・ Die christliche Religion ist ein mächtiges Wesen für sich, woran die gesunkene und leidende Menschheit von Zeit zu Zeit sich immer wieder emporgearbeitet hat.
- 「⑨ 拠点の an」の「下位分野」と考えられる。

⑪ 識別点 (識別する際の「手段」を表わす)

[格支配] 3 格

[例文]

- ・ Ringsum war alles grünlich und trübe. Am dunklen Körper unseres Bootes konnte ich einigermaßen abschätzen, wie weit ich in diesem Wasser sah.
- ・ Tabakladen erkennt man sofort als solchen an einem roten Aushängeschildchen.
- ・ Man kennt den Topf am Klange, den Vogel am Sange, den Esel an den Ohren, an Worten den Toren.

[備考]

- ab- という前つづりと関係あり。

An solchen Beispielen lassen sich die Eigenschaften der reinen Instinktätigkeiten am leichtesten ablesen.

[参照箇所]

文例集 69 (an): S. 360-369.

[佐藤による注釈]

- 「⑨ 拠点の an」の「下位分野」と考えられる。

⑫ 見地の an

- 「見地の an」は、「比較(評価)見地の an」と「異変肢節の an」に分かれる(参照: 冠詞 I: S. 972)。
- 「見地」という観点からは、「③ 着力点の an, 把捉肢節の an」もこの範疇に属する(参照: 冠詞 I: S. 970f.)。

⑬ 比較(評価)見地の an (比較・評価の見地を表わす: 「...の点で」)

[格支配] 3格

[例文]

- ・ Seine Rede läßt an Schlagkraft nichts zu wünschen übrig.
- ・ Seine Ausführungen bleiben an Deutlichkeit hinter denen meines Kollegen zurück.
- ・ Sein zweites Werk läßt sich an Wirkung nicht mit seinem ersten vergleichen.
- ・ Dieser Erfolg stellt an Bedeutung alle vorhergehenden in den Schatten.
- ・ Kunstseide ist ein Stoff, der an Festigkeit der Naturseide nahekommmt und diese an Glanz weit übertrifft.

[備考]

- an が支配する名詞は、性格・性質などを意味する抽象名詞で無冠詞。

[参照箇所]

冠詞 I: S. 954, 963-964, 972-979; 文例集 69 (an): S. 169-182.

[佐藤による注釈]

- 「見地」を表わす他の前置詞、副詞については、冠詞 I: S. 953-955 を参照。

⑭ 異変肢節の an (体などの故障・異常の場所を示す: 「...において」)

[格支配] 3 格

[例文]

- ・ Arm am Beutel, krank am Herzen / Schlepp' ich meine langen Tage. / Armut ist die größte Plage, / Reichtum ist das höchste Gut!
- ・ MONTANUS: Ihr mißversteht mich, ich spreche von der Philosophie, das ist einer Wissenschaft, die mir die Augen geöffnet hat, sowohl in diesem als in andern Stücken. / JERNIMUS: Vielmehr blind gemacht hat sie Euch an den Augen sowohl als am Verstande.
- ・ mich hat er, an Händen und Füßen gebunden, hierher geführt.

[備考]

- an が支配する名詞は原則として定冠詞がつく。

- 異変肢節の an は、auf によっても表現される (「異変肢節の auf」)。

schwach auf der Brust sein / auf eine Ohr taub sein / gesund auf der Lunge sein / auf einem Fuße hinken (参照: 冠詞 I: S. 257, 972)

[参照箇所]

冠詞 I: S. 954, 972-975; 文例集 69 (an): S. 183-197.

⑮ 享受・受益の an (享受・受益の対象を表わす)

[格支配] 3 格

[例文]

- ・ Das Publikum begeisterte sich an den kolorierten Filmen und spendete starken Beifall.
- ・ Sie lasen zusammen Schiller und berauschten sich an seinem edlen Pathos.
- ・ Ich begreife wirklich nicht, wie man am Schach ein solches Vergnügen finden kann.

[備考]

- 不愉快な対象にも用いられる。

Ich sehe vorher, daß diejenigen, welche sich an meinen Schriften zu der Zeit, als sie einzeln herauskamen, so sehr geärgert haben, über gegenwärtige Sammlung derselben gleichfalls seufzen werden.

- freuen と時。

過去: Man freut sich über Vergangenes.

現在: Man freut sich am Gegenwärtigen.

未来: Man freut sich auf Künftiges. (以上 Duden)

[参照箇所]

文例集 29 (前置詞): S. 370-381.

⑩ 仕打ちの an (「仕打ち」の対象を表わす)

[格支配] 3 格

[例文]

・ Er hat nicht fair an mir gehandelt.

・ Du sollst deinen Unwillen nicht an einem unschuldigen Dritten auslassen.

・ Man muß an sich selbst sein Arzt sein. (Nietzsche)

・ so oder so an einem handeln / sich an einem rächen / sich an einer Sache versündigen / an einem treulos werden / sich an einem vergreifen / an einem Revanche (od. Rache) nehmen / an einem Großmut üben

[備考]

- 動詞の「意味」としては、「復讐する」、「寛大な態度をとる」など、共通点は認められないが、一人の人間に「ある仕打ち」を加えるということではひとつのタイプ(意味形態)に属する。
- 混同されやすいものとして「④宛てるの an」があるが、形からも「宛てる」は4格支配であり、意味形態も異なる。

[参照箇所]

ドイツ語前置詞の研究: S. 60-69; 文例集 69 (an): S. 243-265; 文例集 74 (U): S. 169, 171.

⑪ 性質の an, 性質を指す an, 具有の an, 具有性の an, Inhärenz-an (ある性質・特徴などの所有者を表わす)

[格支配] 3 格

[例文]

- ・ An ihm ist mir zunächst einmal das Äußere zuwider.
- ・ Es ist vieles an ihm, was mich ärgert.
- ・ Nichts ist schlimmer an einer Gefahr, als ihre Verborgenheit.
- ・ Die Elektrizität wurde zuerst am Bernstein beobachtet.
- ・ An den umlaufenden Gerüchten ist nichts Wahres.
- ・ Und so sauber wie die Manschetten, so sauber ist alles an ihm.
- ・ An dem Wagen entstand während der Fahrt ein Defekt.

[備考]

- 「本質」と見なせば in, 「具有性」と見なせば an (参照: 文例集 (29) 前置詞: S. 350)。
- この意味形態より「同一視の an」が派生。

[参照箇所]

和文独訳の実際: S. 88-90; 冠詞 I: S. 258, II: S. 297; 文例集 29 (前置詞): S. 343-358, 366-369.

⑱ 同一視の an, Identitäts-an (イコールの関係を表現する)

[格支配] 3 格

[例文]

- ・ Der Kaiser starb in dieser Zeit. Er war ein Herr, der Ulerich trotz den vielen Klagen dennoch Milde bewiesen hatte. An ihm starb dem Herzog ein unparteiischer Richter, den er in diesen Bedrängnissen so gut hätte brauchen können.
- ・ Da wir aber an Euch eine verständige Frau gefunden haben, so hoffen wir als alte Freunde hier Kredit zu haben.
- ・ Du sollst glücklich sein! Ich habe meine Tochter—und einen Freund an dir. Wir wollen scheiden, ohne getrennt zu sein.
- ・ Sie sollen einen Cicerone an mir haben, so redselig, wie der wißbegierigste Tourist ihn sich nur wünschen mag.
- ・ Am Leben hat das Erkennen seinen Gegenstand.

[備考]

「同一視の an」と「同一視の in」はほとんど区別なく用いられることが多い。

[参照箇所]

冠詞 I: S. 487-489, II: S. 294-297; 文例集 69 (an): S. 370-377.

- ⑲ 内容を示す an, 内容挙述の an, 量的内容規定の an (量概念の内容規定を必要とする名詞などに対して, その内容を表わす)

[格支配] 3格

[例文]

- ・ das Höchstmaß an Strafe
- ・ der Vorrat an Trinkwasser
- ・ Ihre Beute an Waffen, Munition und Pferden war sehr groß.
- ・ Rauchgase und das gewöhnliche Leuchtgas verdanken ihre Giftigkeit im wesentlichen ihrem Gehalt an Kohlenoxyd.
- ・ Das Vergrößerungsglas zeigt, was so ein einziger Wassertropfen an Bazillen in sich birgt.
- ・ Wenn ich jetzt bedenke, was ich damals an Verhöhnung, Beschämung und Verachtung alles erlitten habe — unfäßbar, wie ich das alles ertragen konnte!
- ・ es fehlt an etw. / reich an Regen / arm an Ereignissen

[備考]

- an の後ろに来る名詞は「量」としてのみ問題となると考える。したがってこの名詞は無冠詞。

[参照箇所]

ドイツ語前置詞の研究: S. 23-30, 42-44; 和文独訳の実際: S. 80-83, 84-87; 冠詞 I: S. 623-626; 文例集 29 (前置詞): S. 403-406, 414-415, 420-427; 文例集 69 (an): S. 266-293.

[佐藤による注釈]

- 文例集 29 (前置詞) に「増減の an」という項目があるが (S. 387-389), これはこの「内容挙述の an」の一種と考えるべきと思われる。

- ・ Die Zerstörung durch den Krieg, der Zustrom der Flüchtlinge und der normale Zuwachs an Haushaltungen brachten einen Fehlbedarf von 5,8 Millionen Wohnungen.

- ⑳ 破滅の原因, 挫折の直接原因となる外界の威力を指す an

[格支配] 3格

[例文]

- ・ Kant starb an Altersschwäche am 12. Februar 1804.
- ・ an ... leiden
- ・ Sein Angriff ist an meiner Seelenruhe gescheitert.

・ Deine Mutter ist müde geworden, sich an dir zu ärgern.

[参照箇所]

独作文教程: S. 416-418; 文例集 69 (an): S. 306-319.

② 展張方向・展張限度の an (展張: 「どこまでもずっと」; 限度: 「...まで」)

[佐藤による注釈]

「展張」という考え方(意味形態)は、「冠詞」では an, in, auf について「温存定冠詞」という観点からのみ取り扱われており(参照: 冠詞 I, 第三篇第八章「指向性前置詞と温存定冠詞」), an に関しては「およそ」という意味でしか説明されていない。しかし「展張」がより広汎に存在する意味形態であり, 詳しい研究を待つものであることは, 次の関口の言葉からも明らかである: 「そもそも四格という形の用法の過半は, 空間的, 時間的, 量的な"展張範囲の四格"であって, 展張という範疇を用いずしては"四格"という現象の合理的な整理は不可能である。」(冠詞 I: S. 1010)

② およそ

[格支配] 4 格

[例文]

- ・ Der Oberhof hatte sich ganz mit Menschen erfüllt, denn es waren wohl an die hundert Personen versammelt.
- ・ Und es gehörten wohl an die dreißig Dörfer dazu.
- ・ An dreißig Jahre war die Frau verknüpft mit allem, was das Land und er erlebt hatten.
- ・ Schon am Ende des 19. Jahrhunderts kam man zur Überzeugung, daß an 120 000 Sternnebel da sein müssen.

[備考]

- この用法は, 「展張限度の an」から出たものである。つまり bis an die ... 「・・・にも達する」の意から生じた。年齢が「60歳にも達する」は an die Sechzig reichen と言い, die Sechzig は「領域」として考えられている: 「ズーッと進んで, この領域に達するまで」。

[参照箇所]

冠詞 I: S. 1050-1056.

引用文献

- 有田潤 (1985): 「意味形態」の成立. 所収: 有田潤: ドイツ語学講座 I, 南江堂, S. 85-89.
- (1987): 「意味形態」批判. 所収: 有田潤: ドイツ語学講座 II, 南江堂, S. 39-65.
- 荒木茂雄ほか (1959): 関口存男の生涯と業績. 三修社 1975.
- 佐藤清昭 (1995): 関口存男の「やっぱり」は心態詞にも該当. — 「Doch とはなんぞや?」の構造主義的解釈. 所収: 探究 ドイツの文学と言語 立川洋三先生定年退職記念論文集, 東洋出版, S. 1-23.
- (1998): 関口存男文例集. — 分類の観点と利用の可能性 —. 所収: 浜松医科大学紀要一般教育 12, S. 57-73.
- (2000): 関口存男による前置詞の意味分類. — 「激突急停止の in」(ほか)と「前置詞論」—. 所収: ドイツ語学研究 (冠詞研究会) 10, S. 11-48.
- SATŌ Kiyooki (1981): Zum Begriff der Dritten Bedeutungsform bei Sekiguchi. In: アスペクト(立教大学ドイツ文学科論集) 15, S. 38-55.
- (1987): Der Artikel bei T. Sekiguchi. Die Bedeutungsform-Grammatik als Grammatik des Sprechens. Tübingen: Narr.
- 関口存男 (1931-1933): ドイツ語大講座. 6 巻, 外語研究社 1936.
- (1932): 和文独訳の実際. 三修社 1994.
- (1933): 意味形態を中心とするドイツ語前置詞の研究. 三修社 1984.
- (1935-39): 獨作文教程. 三修社 1971.
- (1939): ドイツ語学講話 1. 三修社 1981.
- (1960/61/62): 冠詞. — 意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究 —. 3 巻 三修社 1976.